



「学問の魅力」や高校との「学びのつながり」をひもとく

学びのみちしるべ

第5回

大学での学びの中身と、その学問が社会でどう役立つのかを大学の先生が解説。進路選択のみちしるべとなるよう、高校での学びがその学問にどうつながるのかも聞きました。



日本文学

【お聞きした先生】>> 奈良大学 文学部国文学科 上野 誠教授

Q この学問の内容、面白さは？

A **文学は人の心情の歴史。人がいかに生きるかを学ぶのが日本文学**

かつて学問と言えば、その時代に生きた人たちが何を思い、何を伝えようとしたかを古典に学ぶことでした。それを今なお踏襲しているのが日本文学。私たちが普段使っている言葉で書かれた詩歌、物語、小説、散文、戯曲などを通して人間の心や人生、そしてさまざまな社会のことを学びます。例えば、源氏物語を読むと恋というものにどう向き合えば良いか、平家物語からは人間を信じるということはどういうことか、また、夏目漱石の小説からは個人と社会はどう調和するものなのかなどといったことが見えてきます。

私は古代遺跡が数多く残る福岡県に生まれ育ったこともあり、高校時代は古代史に興味があったのですが、いろいろ考えた末、人の心の歴史を学びたいと思うようになり、日本文学の研究の道に進みました。以後、一貫して研究対象は万葉集。特に研究テーマとしているのは「万葉文化論」です。万葉集は8世紀に誕生した歌集で、そこで歌われているのは7世紀、8世紀を生きた人々のこと。歌の一つひとつにはあたかもスナップ写真のように、実にさまざまな情報が詰まっています。それを生活、社会、表現という3つの課題から読み解いていくことで、当時のことがいろいろわかってきます。例えば、昔は洗濯が女性の労働だったので、男たちが旅先で「家に帰って洗濯してもらいたい」と歌うのは、妻を恋しく思うからです。また、「くれなゐ」という言葉が万葉集には時折出てきますが、この語源は呉の国の藍、つまり「呉(くれ)の藍」から来ており、そのことからこの時代、外国から入ってきた染色の赤にたいそう衝撃を受けたことで、生まれた言葉だと推察できます。

そんな風に万葉集に出てくる言葉の意味や使われ方を知ることで、私たちは豊かな言葉の世界を知り、日本語の伝統のなかで古代から地続きで生きていることが実感できます。言葉の深み、伝統に浸る楽しみが味わえるのが日本文学の魅力です。

Q 社会でどのように役立つ？

A **今、日本人に一番足りない「生きる知恵」が身に付く学問です**

あくまで個人的見解ですが、私は日本文学こそが世の中で一番役に立つと信じています。なぜなら、人間が生きていくうえで最も大事なことを真剣に考える学問だからです。「幸せになろうよ」と言うことは簡単ですが、では「幸せって何？」と考えることは難しい。本当は一人ひとりが考えていべき課題なのですが、日々の生活のなかで、そんなことを真正面から考える人は少ないです。しかし、その問題に真正面から取り組んでいるのが日本文学。あなたがもし政府の役人になり、国会で証言を求められたとき、いったいどういう哲学で、真実を語るのか。あるいは、医者になったとして余命1カ月の人にどう接するか。その答えを見出すために必要なことが学べます。それによって今、一番日本人に足りない「生きる知恵」も身に付いていくはずですよ。

Q 高校の科目とのつながりは？

A **高校の国語とは別物。とにかく好きな作品をとことん読む習慣を身に付けて**

最も近い教科は国語ですが、まったく別物とらえてもらった方がいいかもしれません。みんなで一つの作品について学ぶのではなく、日本文学は自分が好きな作品や作家を取り上げ、その作品が誕生した時代と、自分たちが暮らす現代について深く考える学問だからです。例えば、明治と昭和初期、現代とは同じカレーライスでも社会的価値が違います。明治のカレーは軍隊の食事であり、昭和の時代は憧れの洋食でした。しかし、現代は何気なくごく普通に食べる食事です。同じカレーでも登場する時代の異なる文学作品によって取り扱われ方が違うわけです。そういうことをさまざまに考察していく学問と言えます。

もし、日本文学を学びたいなら、高校時代のうちに好きな作品と出会ってほしい。そして、その作品について自分の言葉で語れることも大切。どんな書物でも良いし、漫画でもかまいません。そのためにも日頃からいろいろな作品を読んでほしいと思います。

好きな作品が見つかったら、その作品が誕生した前後10年間の年表を見ると良いと思います。時代背景がわかり、より深くその作品を楽しめます。



オススメ BOOK

上野 誠先生が高校生にぜひ読んでほしいという著書「日本人にとって聖なるものは何か」(中公新書)。日本人は古代から何を尊いものと思うのか、何を考えてきたかがわかる一冊。



建築学

【お聞きした先生】>> 横浜国立大学大学院 都市イノベーション研究院 (建築学教室) 大原一興教授

Q この学問の内容、面白さは？

A **ただ、単に建物をどう作るだけでなく、建築が人間にとってどういう意味があるかも考える**

建築を対象にする学問です。住宅、ビルなどから、公共施設、町や都市、地域など人間を取り巻くすべての建造物や空間が守備範囲となります。大まかに「構造系」と「計画系」に分野は分かれています。安全・快適で美しく、かつ使いやすい建築を追求するというのはどちらにも共通することですが、それをハード面から追求するのが「構造系」、ソフト面から探るのが「計画系」となります。

「構造系」は数学や物理、力学を基本とした工学としての建築。どう作るかに重きを置いており、具体的には災害に耐える建造物の設計、木、鉄、コンクリートなどの建築材料や施工法、給排水や空調などの設備や環境配慮、防災などの研究を行います。一方、「計画系」は社会や人間にどう影響するのかを考える分野。歴史文化や人の行動にどう建築空間が対応しているか、住みやすい住宅、働きやすいオフィス空間になっているか、さらに心地良い都市や田園空間に対象が広がっています。「構造系」と「計画系」、この2つの側面があるから面白く、それが建築学の大きな魅力です。

私の専門は「計画系」に入る「建築計画学」。設計の前段階で、建物を作る立場ではなく使う立場で考える分野です。すなわち多様なユーザーの心理や行動、関係性の視点を踏まえ、人間が過ごすのに快適な建築、地域の構築を目指しています。私にとって建築は社会を見るのぞき窓のようなもので、建築を通じて社会を考えています。建築はあくまで手法であって、建築物を作ることが最終ではなく、その建築を通じて人がどうなるか、建築によって社会をどう変えるかという視点で研究に取り組んでいるわけです。

対象は建築物だけでなく地域全体に広がります。その一つが「エコミュージアム」。町全体を博物館ととらえ、その地域にある古い建物や公園、自然環境などを生かし、住む人の手によって魅力ある町に再生していくというものです。地域の宝物を次世代に伝えていく取り組みです。これまでに「三浦半島まるごと博物館」「ちがさき丸ごとふるさと発見博物館」などにも関わっています。

Q 社会でどのように役立つ？

A **課題を抱える地域づくりの一端を担えるし、何より建築の学びはどんな社会でも応用できる**

今は新たに開発して町を作るという時代ではなく、どの地域でも既存のものをいかに継承していくかが大切になってきています。そんななか、空き家をいかに活用するかは結構重要なテーマで、私たちもどう使ったら良いのかの研究を進めているところです。現在、取り組んでいるのは鎌倉の高齢化が進む住宅地の課題。本来なら特別養護老人ホーム(特養)を建設したいところですが、戸建て住宅だけの地域で土地が細分化してそれが難しい。そこで空き家を活用し、町全体で特養のような機能をもたせようといったことを考えています。



地域の人々とこれらから建てる高齢者地域施設を計画するワークショップ。

特にこれからの社会は、更地から開発するのではなく、今ある資源をどう再利用し、継承することでどう町や地域を変えていくかが大事になってくるので、空き家の事例のような経験は必ず社会に役立つはずですよ。

また、新しい社会に対応し、そこにあるもので別の新たなものを作り上げていくといった仕事は建設業以外でも生まれてくると思うので、そうした場合でも建築学の素養や、研究の中で身に付けた応用力は柔軟に活用できると思います。

Q 高校の科目とのつながりは？

A **建築学は文系理系にとらわれない総合的な学問。すべての知識が必ず生きてくる**

基礎となるのは数学的な考え方だったり、技術的には物理、化学の知識が必要ですが、建築学は文系理系にとらわれない学問なので幅広く勉強しておくことが大切。社会や歴史、地理などの知識もあった方が良いでしょうし、何より最近では国語の力が重要だと感じる人が多いですね。人に企画などを提案する際にどれだけ的確に自分の言葉で伝えられるかがポイントになってきますので。

私自身は、子どもの頃からものづくりが好きで高校時代から工学系に進もうと思っていました。その中でも建築は、文化や社会を含め、幅広い興味関心に応えてくれる学問だと思い、選択しました。子どもの頃から本や絵、音楽が好きでそれらを幅広く見聞していました。その経験も建築を考えるうえで役に立っています。高校生の皆さんも幅広くさまざまな本や文化に触れてほしいですね。